

光の標

東京都 山田 莉星

深く呼吸をしたつもりなのに、十分な量の酸素が肺に届かない。赤茶けた地面に座り込んで見上げた空は驚くほど深い青色で、鮮やかなグラデーションと燦然と輝く夏の太陽が目にも染みだした。

もしも「天国」と呼ばれる場所があって、読んで字のごとく天上に存在するのなら、今私がいるこの場所こそが日本で最も天国に近いところなのだろう。

二〇二三年八月五日午前十一時、私は日本最高峰・標高三七七六mを誇る富士山頂でそんなことを考えていた。遠くから見ると優美な姿に反して、間近で見ると火口の景色は随分と荒々しい。これが、私が辿り着きたかった場所、見たかった景色なのだという感動と、約九時間かけて御殿場ルートを登ってきた疲労感が全身を満たしていた。

一通り写真を撮った後、私がザックから取り出したのは古びたヘッドライトだった。夜明けまで登山道を照らしてくれたそれを手にして、私は零れそうになる涙をこらえていた。

母の三歳上の兄である伯父は、生涯山を愛し、地元の子供会に所属して休みのたびに登山を楽しんでいた。鷹揚で誰に対しても優しく、一方で生真面目さと正義感の強さで苦労することも多い人だった。私は幼少期から伯父が好きで、「おっちゃん」と呼んで慕っていたし、伯父も私と妹を心底可愛がってくれた。就職で地元を離れ、上京する私を誰より応援してくれたのも伯父だった。

そんな伯父が亡くなったのは二〇一九年秋のことで、まだ五十六歳という若さだった。その前年に大腸がんのステージ4と診断され、闘病していた。最後に会ったのは、亡くなる一週間前だ。病院に駆けつけた私は、久しぶりに見る伯父の姿があまりにも記憶と違って痩せて細っていたために愕然とした。

伯父は私の手を握り「よう来てくれたな。元気でやっとなるか」と言った。こんな時までまづ姪を労わるような伯父がなぜこんな病に侵されなければならないのだろうか。その不条理に打ちのめされながら、ベッドの端に座ってしばらく話をした。棚には山岳雑誌があり、「おっちゃん、元気になったら何がしたい？」と、叶わないと知ってなお一抹の希望に縋りたかった私の問いに「山に登りたい」と答えた。最後に私が「来週もまた来るからな」と言い、「わかった。待っとる」と手を振ってくれて……それが最後の会話になった。

伯父の登山用品の多くは所属していた山岳会に寄付したが、ただ一つ、ヘッドライトだけ

は私が譲り受けることになった。当時の私は趣味の写真撮影のために友人と近場の低山に行く程度だったが、かねてより「一生に一度くらい富士山に登りたい」と思っており、その思いは強くなる一方だった。

夏も冬も、伯父と数多の山を共にしたヘッドライト。いつか富士山に登る時は必ず持つて行こう、そう決めた。幸いなことに、共に富士登山を目指してくれる友人もいた。

それから、富士山登頂を目標に掲げて体力づくりを開始。翌シーズンからいくつもの山に登った。知識をつけ、装備を整え、山のグレードも上がっていく。丹沢山系、八ヶ岳、北アルプス……。どの山、どんな工程でも、私は常にザックに伯父のヘッドライトを忍ばせていた。山に入ると、いつも「おっちゃんもこんな景色を見ていたのかな」と思いを馳せた。一方で母は、登山に励む私の姿を見て亡き兄を重ねつつ「くれぐれも安全に。元気で下りてくるように」と度々連絡をくれた。

その後、富士山へのチャレンジは二年連続で荒天により中止となり、遂に今年が「三度目の正直」となった。その夏指折りの天候条件に恵まれ、夜明け前の暗闇の中を一步ずつ登りだす。長らく使われてきたヘッドライトは、しっかりと道を照らしてしてくれた。

日本最高峰、その頂への道には、未知の景色が広がっていた。涙が出そうなほど美しい朝焼け、荒涼とした山肌と瑞々しい高山植物のコントラスト、眼下に広がる緑の大地と真っ青な海。冷たく透き通っていく空気……。

雲上の登山道を踏みしめながら、私の脳裏には「大雲」という言葉が浮かんでいた。これは伯父の戒名の一部で、山好きだったことに由来する。当時は正直ピンとこなかったのだが、ようやく理解できた。山から見る景色、広がる雲、大いなる自然を感じる場所。この二文字はまさに伯父にふさわしかった。

遂に遥か天空の頂に達した時、私はようやく「いつか一緒に富士山へ」という願いを叶えた喜びに震えた。そして、ここに来るまでの長い道のりで、決して登山が得意ではない私を叱咤激励し、一緒に歩み続けてくれた友人たちに、心の底から感謝した。

私が山頂の浅間大社奥宮から持ち帰った御朱印は今、実家に飾られている伯父の写真とともにある。